

圖版要項

一 刺繡天人文幡 京都 小川睦之輔氏藏

刺繡 高三十釐 (九寸九分)
幅 十二釐八 (四寸二分)

佛像或はその世界を刺繡で現はす例は上代に盛であつたが、當然それは隋・唐の踏襲であるが、是等の繡佛ははじめ西域に於て造られ、支那に傳播されたであらうと考察されてゐる。神田喜一郎氏の「支那の繡佛に就いて」佛教美術第三冊 現在はその遺品が可成り發掘されて、その中には我國の遺品の繡佛に相通する趣のものが認められる。

刺繡は顔料による彩色の方法が發達しない先に、色糸によつて美しく配色の効果を出した、原始的な彩色法と稱される。それが殊に女人の佛教信仰に結びつき手づから繡佛を現はすことが盛行したのであらう。最も好例として天壽國曼荼羅がある。

この小川家藏の繡佛幡は法隆寺傳來として諸家にあるものと同類であることは、台裂が同質の平絹、又撚糸を平刺にした方法が大體相通するのによつて知られる。そして是等の天人の圖様が飛鳥、奈良時代にかけての繪畫や彫刻に現はれてゐる天人の姿に鑑み同時代の遺品と認められてゐる。

但し今知り得る十點餘りの天人の趣きも詳しく見ればそれ〴〵に多少の趣の變化が看取される。例へば、東京美術學校藏(美術研究第四十八號所載)の素朴可憐、國立博物館及び藤田男爵家のものは厚味のある體軀を太い肉線で劃する天人である。當小川家の天人は楚々として輕やかに飛ぶ姿態乍ら一面敬虔な趣がある。蓮花座や領布も細やかに形が整ひ、この種のものの中では最も端麗である。殊に色糸の配合、刺繡の法も洗煉された所謂上手のものである。

かやうにのびやかな天人の姿は、有名な法隆寺獻納の灌頂幡の銅板に鏤刻した天人に一脉通ふものがあると思ふが、この銅幡は天平十九年二月の法隆寺資財帳に「金銀銅灌頂一具 右片岡御祖命納賜 不知納時」とあるのに當ると考へられてゐて片岡御祖命は上宮太子の御子片岡女王と言はれてゐる(法隆寺大鑑解説)。これは恐らくこの繡佛幡の製作期を示唆するものと考へられる。
(白畑)

二 傳李安忠筆鶉圖 京都 守屋孝藏氏藏

紙本著色挂幅裝 横三(三)釐(九寸九分)
四(八)釐(一尺三寸二分)

三 沈周筆九段錦畫冊 奈良 林平太郎氏藏

紙本淡彩冊子裝 横一八釐(五寸九分)
三四、七釐(一尺一寸四分)

以上參照 シャアマン・イー・リイ「支那繪畫の研究について」

四 伴大納言繪詞 東京 酒井忠博氏藏

紙本著色卷子裝 横三一、四釐(一尺三分)

參照 鈴木敬三「伴大納言繪詞に現はれたる風俗」

八 沃懸地螺鈿毛拔形太刀 及部分 奈良 春日神社藏

全長 九六・四釐(三尺一寸八分)

紫檀地螺鈿劔 部分 奈良 春日神社藏

全長 一〇六・七釐(三尺五寸二分)

木目塗螺鈿劔 部分 廣島 嚴島神社藏

全長 九九・一釐(三尺二寸七分)

以上參照 岡田讓「春日神社藏沃懸地螺鈿毛拔形太刀」